

生研 50 周年を迎えて

東京大学名誉教授
(第 11 代所長・元第 4 部教授)

武藤 義一



1949 年（昭和 24 年）5 月 31 日公布の国立学校設置法にもとづいて設置された生研が 1999 年に 50 周年を迎えることになり、今さらながら時の流れの早いことに驚くとともに半世紀を過ぎたかと感慨無量のものがある。さらに生研の前身であった第二工学部は 1941 年（昭和 16 年）1 月 30 日に設置が政府決定され翌年 4 月 1 日に開設されたのであるからそれから 58 年を経たことになり、昭和 16 年秋ごろであったと思うが西千葉の建設予定地を見学に行ったことが夢のように思われ私自身がまだ生きていることが不思議に思われるほどである。

50 周年を迎えるとき第二工学部から生研に移行する前後のことが忘れられない思い出として走馬燈のように過ぎていくのである。今になると不連続な一場面だけが頭をよぎるのであるが、そのほとんどは我々が四面楚歌のなかにあってもその苦境にどのように耐えどのように切り抜けてゆかなければならないかという場面だけであるのも不思議である。普通は辛いことは忘れてしまい楽しいことだけが残るというのに。

今にして思うとあの苦難を乗り越えることができたのは瀬藤象二先生の不撓不屈の精神とそれによって一同を叱咤激励され、とくに私などはややもすればひるみ勝な気持を引きしめて前を見据えることができたように思う。それにもまして一同が一致団結してこの困難を乗り越えて努力した成果が今日の生研の発展につながってきたものと思う。はるか後になって茅誠司先生にお目にかかったとき「生研では選定研究（茅先生は無尽のようなものと言われた）をまだ続けていますか」とのお尋ねがあり、そうですとお答えしたら、教官各位が割当研究費のかなりの分を供出して限られた教官に配分して成果を促進するというのは言うは易く実際にはほとんど例をみないと思うが生研の諸君には危機意識があって、それが一丸となって研究を促進していると思うと述べられたことを想い出すのである。

当初 35 部門でスタートした生研が各種センターを含んで 51 部門にまで発展したばかりでなく種々の点で国立大学付置研や文部省直轄研などの運営のモデルにもなっていると聞いて、ここまで努力した各位に深甚の敬意を捧げたい。私自身の恥しいことで恐縮であるが設立当初の生研の任務が「生産に関する技術的問題の科学的・総合的研究、ならびに研究成果の実用化試験をつかさどること」であったのに、その真意が仲々のみこめなくて生産技術の振興が我国にとって重大問題であることを覚えるまでかなりの時間がたってしまったのであった。しかしその重要性の認識とともにそのための研究にとって迅速にして広汎な情報に常に接することがもっとも必要であることを覚らされたのであった。

まさにその時に生研の東京移転の計画が始まり 1959 年（昭和 34 年）に正式に決定し、2 年後から六本木の地に逐次移転を開始して約 1 年で完了した。思い切った東京移転はその後の国際交流活動の協力の推進とあいまって更なる発展をとげて今日に至ったことは私などの述べるまでもないところである。さらに次なるジャンプとして駒場移転が決定し既に着手にとりかかっていることを聞いて今後生研がどのように発展してゆくのか私には想像を絶するところであるが、しかしその衝に当たる方々の苦勞を思うとさぞたいへんであらうと考え、ひたすら御自愛を祈るだけである。

最後にどうしても触れておきたいことは事務部の方々の献身的な努力である。特に所長に選出されて多くの事務部の職員と直接に触れるようになってから特にそのことが痛切に感じられるようになり、それまでに気付かなかったことに恥じいたことが多々あった。思い出しただけでも研究部門増や各種センターの設置、新しい実験室の新営、大型プロジェクトの進行や実験棟の大型改装などいずれもその後の生研の発展の基礎となったことに大変な努力をされた姿に接して、このような仕事には手をつけられない方がよかったのかな、とふと考えてしまうこともあった。それとともに数えられないほど多かったとしか思い出せない組合交渉のことが私にとっては辛い思い出として残っていて、事務部の幹部の方や多くの教官の方の支援と激励がなかったら所長の任務が果たせたか疑問であった。最近になって当時最も苦手であった組合書記の辻明子さんの計報に接しある時代が終了し新しい時代に入ったことをあらためて感じさせられたのである。新時代とともに生研の益々発展してやまないことを祈る次第である。